

「母」を殺す言葉のために 「杜子春」から「母の発達」へ

篠崎 美生子

一、

「母は全て本能的に「慈母」である」  
いまだに根深いこの母性イデオロギーの浸透に、日本の近代文学が果たした役割は極めて大きい。殊に一九一〇年代以降、活字の中に登場した「慈母」は数知れない。父へのルサンチマンと対照させる形で万能の母を語る夏目漱石「硝子戸の中」(一九一五)、子どもへの愛に生きた亡妻の半生を神々しく語る有島武郎「小さき者へ」(一九一八)が話題になったほか、谷崎潤一郎の一連の「母恋ひ」物<sup>(1)</sup>が始まるのも、この時期である。児童向けの芸術雑誌を標榜した『赤い鳥』(一九一八・七)も、やはり「慈母」の物語で埋め尽くされている。

中でも象徴的なのは、芥川龍之介「杜子春」(『赤い鳥』一九二〇・七)であろう。畜生道に墮ちて馬に姿を変えられた母は、無言の行を続ける息子のために鞭打たれ、「息も絶え絶えに」なりながらも「かすかな声」でこつ呼びかける。

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰つても、言ひたくないことは黙つて御出で。」

「息子の心を思ひやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さへも見せない」母親の「有難い志」「健気な決心」を語り手は絶賛する。仙人鉄冠子も、「お母さん」と叫んで行を破り目覚めた杜子春に向かい、「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ。」と打ち明ける。杜子春は、母の味方に包圍されており、それに逆らえば生きていくことすら許されない。ここでの「慈母」の権威は絶対なのである。

いや、「大王が何と仰有つても、言ひたくないことは黙つて御出で」という母の言葉こそ、大きな権威から子どもを守る盾なのだ、人は言つかもしれない。が、「黙つて御出で」と言いながら、黙つてることが不可能なダブルバインドの状態に子どもを追い込んでいる以上、それは暴力的な言葉なのであり、その暴力性を肯定する語り手・鉄冠子・閻魔大王らの権力と結託しているとも言えるのだ。語り手が「世間の人たち」と対比して称揚する「母」こそ、むしろ最も巧妙に「世間」を代理表象しているのだとも言つてもよい。

こうした構造は、日本に家族国家主義が定着し、機能していった一九〇年前後から敗戦時までの社会状況を参照すると、極めてわかりやすい。

明治民法施行（一八九八年）以降、「家族」はミニチュアの天皇制として子どもを再生産する装置となった。<sup>(4)</sup>子どもは明日の徴税・徴兵を担う者として「発見」され、母は、その子どもの量と質を確保するために「発見」されていったのだ。女学校教育は一八九九年以降「良妻賢母」主義を基本とするようになり、エリートではない女性に対しても、母乳至上の言説が発せられるようになる。このような中で、「主人」との分業が可能な都市新中間層の「主婦」であれ、生産労働に従事せざるを得ない女性であれ、同様に「母」としての役目を最優先することが至上命令になっていく。母親に対する国家の経済保障を要求する平塚らいてうの主張は、この矛盾を突くものであつたはずだが、国家は保障ではなく、「靖国の母」の顕彰という最も安上がりな方法で矛盾を埋めるそぶりをみせた。

「小説」は、この半世紀の間に、「慈母」を顕彰して国家権力に寄り添ったメディアたちのひとつだったと言える。母は命がけで子どもを育て、子どもは母の愛に心えて優秀な兵士になる、という当時の理想的構図と、母の自己犠牲を前にして仙人への夢（＝「世間」的な「人間」の道から外れていく行為）をあきらめる杜子春の姿、しかもそれを「反つて嬉しい」と思わずにいられない杜子春の姿とは、相通じるものがある。母の自己犠牲の陰に顕彰への欲望が隠れていることは誰にも悟られてはならないため、その愛は自然且つ純粋なものと見なされ、一方、子どもがその母の愛に心えることは、自然である以上に、人間として当然あるべき道だと教育されるわけである。かくして、「慈母」を語るメディアに包囲された数限りない杜子春たちの命は、母の名において国家に捧げられたのである。

二、

だが不思議なことに、こうした逃げ場のない構造は、現代でもしばしば肯定的に語られている。

・母の、我が身を捨てて子を思う愛情に接し、自分にも愛の情が彷彿と湧き起こり、禁をおかして愛のほとはしりの叫びをあげ、「ユートピア」からの 篠崎注（脱出に失敗するのである。<sup>13</sup>）

しかし、芥川作品系列の中より理解するならば、「杜子春」に見られる母親は、「西方の人」の マリア をその典型とする、観念 や 知識、 近代的自我 に対立する 自然、 存在、 肉体 としての象徴的な意味合いをその背後に常に隠しもっているものであり、 聖霊 と マリア に示される二元論を濾過して理解すべき性質を、併せもっている存在なのだ。母親の 無償の愛 に示唆されて地上に回帰する「杜子春」にも、知識や理知、観念や自意識で塗り固められた芥川の、自己嫌悪を伴った自己に対する批評、及んでは日本近代人に対する、ほろにがく、絶望的な批評といった、それなりの毒味を漂わせていることは忘れてはな

らない。<sup>(14)</sup>

「杜子春」の論者たちは皆、「母親の無償の愛」を疑わず、その「愛」が強い天道（仙人をあきらめること）を、正しいものと信じて疑わない。<sup>(15)</sup> おそらく、彼ら（男性の）論者たちが杜子春に感情移入しつつも、閉塞感に苛まれないで済むのは、自らを 観念 や 知識、 近代的自我 の人として設定し、 自然、 存在、 肉体 を象徴する「母」からは身を遠ざけていられるからであろう。

ちなみに、ちよつど一九〇〇～二〇年代にかけて日本でもベストセラーとなったO・ワイニンゲル（ヴァイニンガー）『性と性格』<sup>(16)</sup>は、人間の各個体が両性の要素を併せもつ（M+W）といういかにも「科学」的な装いの言辭を用いつつ、逆に男女を本質主義的に規定している。彼によれば、「男性的要素」（M）には「性慾以外、戦闘、遊技、社交、宴遊、議論、科学、事務、政治、宗教及び芸術」への意志や才能が含まれ、「女性的要素」（W）は、「性慾」に終始すること。但し、互いに異性の要素が五割に達することはないため、「女性」というものは半ば以上が「性慾」で満たされており、よつて「女性」は、「母」か「娼婦」かのどちらかのタイプとして繁殖に貢献するほかないという。また、ゆえに、「芸術」の要素を最大限に持つ「天才」というものは、「男性」にしかあり得ない、と定義される。

この図式を内面化している場合、「男性」である「息子」は「母」に対して一種の優越感を持つことが可能である。この優越感、母に操られ、母の希望を叶えるためにこそ、国家に公認されるに足る成人男性になったのだというプロセスを彼に忘れさせてくれるだろう。また彼が、母の「顕彰」への欲望を満足させられない不甲斐ない息子であったとしても、彼は母の希望を 自然、 存在、 肉体 に発するものと見なし、罪悪感から身を引きはがすことができるだろう。

母子の葛藤は、長い間、母と息子の間に特有のものとして語られてきた。エディプス・コンプレックス、阿闍世コンプレックスもしかりである。江藤淳『成熟と喪失』も、安岡章太郎『海辺の光景』（一九五九）を参照しながら

ら、日本の近代には、「出世」できなかつた「恥づかしい夫」父を疎外し、息子の「出世」による名誉挽回を望みながらも、共犯的に「粘着した結びつき」を維持し続ける母子の閉塞状況が潜んでいると指摘する。

あの「恥づかしさ」から自由になるうとすれば「教育」をつけさせなければならぬが、「教育」を受けた息子はかならず自分から離れて行く。いや、「教育」というかたちで「家」のなかに忍びこんで来た冷たい無機質の「近代」というものが、「むづかりては手にゆられ」ていた息子と彼女との動物的な親しさを切断する。この危機感が母親の情緒を一層「押しつけがまし」くするのである。<sup>(17)</sup>

江藤は、このような閉塞状況を、敗戦後数十年を経過した時点では既に失われたものとして語っている。だが、「押しつけがまし」い情緒への郷愁が、ワイニンゲルの図式と燃り合はせて現代にも残っていることは、江藤のこの書物の存在自体が、またそれが版を重ねて享受されている事態が、或いは「杜子春」の母への肯定的な評価の群れが雄弁に物語っている。男性（ジェンダー化した）読者にとって、「海辺の光景」の「狂気」の母や、「杜子春」の愚かしい母は、女＝自然 という彼岸にいる、どこか甘美な像としてイメージされているのだらう。「母」に対する「息子」たちの優越感はその関係の閉塞を見事にカムフラージュしているのだ。

江藤は、遠藤周作「沈黙」（一九六六）の踏み絵のイエスに「母」を重ねて、こつ語り続ける。

「私」は「母」を捨てた「父」について「母」を裏切り、そうすることによって「母」を破壊した。しかしそうして汚された「母」は「私」をなお赦し、つけいれてくれなければならない。否、「母」を破壊すること自体が、「母」につけいれられることではなければならない。そうでなければ「私」は決して赦されず、救われもしないから。

ここで想起されているのは、「母」の「破壊」ではなく、自分による「破壊」が意味を持たないような自然としての「母」である。こつした甘美な母殺しは、却って永遠に「母」を保存するこの叫びに行き着くほかない。

お母さん！ もついちど、ぼくをにんしんしてください！<sup>(19)</sup>

一方、「母」と「息子」の間の、濃厚かつ甘美な閉塞状況に比べ、「母」と「娘」の関係は淡いものとされ、論じられること自体が非常に少なかった。就中、上野千鶴子は、「海辺の光景」の母「息子の関係と対比させながらこのように語る。

母子同盟はつねに母と息子のあいだの同盟であり、娘はこれに関与しない。「いずれは他家の人」であることを運命づけられている娘に母親は息子ほどには関心を向けなければかりか、娘は同性の若い女として母の隠れたライバルでもある。だからといって日本のエレクトラは、ギリシア悲劇のエレクトラのように父親に同一化もしない。母の抑圧者である父は夫として最悪の役割モデルであるばかりでなく、その家庭の専制君主に唯々諾々と従う母もまた、「こころはなりたくない」反面教師でしかない。かくして娘は家の中でもっとも仮借ない批判者となる。とはいえ、その家のなかから自力で抜けだす道は娘には閉ざされている。自分の運命もまた身も知らぬ男の手にゆだねられ、母の運命と同じような道をたどるほかはないと自分の無力を呪うことで、日本のエレクトラは「不機嫌な娘」と化す<sup>(20)</sup>。

確かに、日本の近代小説において、母に大事にされる子供は、圧倒的に女兒より男児であった。一九一〇年代の、初期「慈母」小説として先に例示したものは、「小さき者へ」「杜子春」ほか、子供は皆男児である。一方、平林たい子「施療室にて」(一九一九)で、脚気の母乳によって実母に殺されるのは女兒であった。太宰治「斜陽」(一九四七)でも、貴族的な母はかずに日常生活を依存しながら、彼女を弟の直治ほど重んじない。上野が「女装した家父長制」と名付けたように、「自己犠牲する母」がその脅迫的行為によって、無責任な「父」の代わりに子供を支配し、息子の成功だけを夢見るといふ制度が存続している限り、母にとって娘の使い道はないのだ。例外的に母に寵愛されたり執着されたりしたのは、身を売って稼ぐことのできる娘ばかりであったと言える<sup>(21)</sup>。

しかし、今日、その成功によって母の「顕彰」への欲望を満たすことができるのは息子ばかりではない。「他家」に嫁入るといふ觀念が薄れた今日、むしろ同性の娘こそが、未婚既婚を問わず、あり得たかも知れない自分の社会的成功を果たす分身としてふさわしい、と感じる母も少なくないはずだ。

一九九〇年代以降、家族間の共依存やアダルトチルドレンについての言説をリードしてきた斎藤学によれば、共依存関係に陥る娘の母には、世代的な特徴があるという。

(九〇年代以降の 篠崎注) 過食・拒食症者の母親は、第二次大戦後に青春期を迎えた人々です。それまでよりずっと多くの女性が、大学まで進み、自分なりの理想を大学時代に培うことのできた世代に属しています。(中略) しかし、この世代の女性たちは、それまでの女性の経験しなかつたような迷いの中に置かれることになりました。なぜなら彼女たちは、学生時代には個人的達成の「大志を抱く」ように励まされながら、他方では伝統的な妻・母の役割(他人に奉仕する役割)を当然のこととして押しつけられ、たいした葛藤も持たずに、妻や母の役割を選んでしまったからです。(中略) たまたま従順な娘に恵まれた人は、その娘を自分の愚痴の聞き役、人生の相談相手に仕立てました。娘が「幼いカウンセラー」として母親を支えるようになると、ここに母・娘の強固なカプセルが形成されます。

幼いカウンセラーは相談相手の表情に敏感で、その不幸を自分の不幸として共に悩むようになります。意識化できない野心や怒りや寂しさや恐れは、増幅された形で、母親から娘に注入されます。母親が断念した社会的成功への野心は、一層明確化した形で娘の中に定着します。<sup>(23)</sup>

「母」にとって、「娘」が「息子」以上に有効な自己実現の具として「発見」された今日、そこに「息子」の場合と同様の閉塞状況が生まれるであろうことは、容易に想像できる。いや、ワインゲルのなコードに従うならば、「娘」は「息子」と違って、同性である「母」を生涯自分の身から引きはがすことができないであろう。「娘」が自分の「成熟」を目指すなら、「息子」とは違った切実さに基づいて、母殺しを敢行しなければならぬ。

#### 四、

笹野頼子「母の発達」(一九九四)は、まさにそうした、娘による母殺しを試みた小説である。

人間は自由に生きるべきだ、と母は絶えず私に言ってきたが、自由はエリートの夫を持って、家事を完璧にこなす女医にしかやって来ないのだった。といつても、母は別に女医ではなく仕事は職場のライバルだった男達の妨害に遇って辞めさせられてしまっていた。母は、現実に絶望していた。私の性別も嫌だったのだと思う。(「母の縮小」以後「縮小」と表記する。)

「女医」になるという自分の夢を娘に代理させようとする母は、「登校拒否のあげくに、進路を国立大学の医学部から私立の薬学部に変えろと言われ」始めた高三の娘を圧迫する。入試の季節になつても「睡眠時間の調整も出来」ない娘と、「ただ投げ遣りな声になり私と同じくらい長く布団に入つて」いる母は、状況が悪くなるほど一体化していく。「女医」になれるなら自分の分身としてふさわしいが、なれないとすれば、娘とは母にとつて、「女性」としての自分の限界・短所を再生産し現前する憎むべき装置でしかない。娘の「性別が嫌」になるのは、恐らくその時である。<sup>(26)</sup>

一方、そう見なされた娘の目に、母は「縮小」して見え始める。精神分析上の「解離」の一種(小視症)とも言えそうなのこの幻を通じて、娘の「私」は、「自分の嘘や願望を声に出す事で、視界の中にある幻の母の、身長や形態を自由自在に操る事が出来るようになっていく。「親指姫やニルス」の「物語」の中に母を当てはめて動かすという作業を十数年続けたあと、「私」はやっと「縮めた母は、結局母という文字に過ぎないのではないか」と気づき、母をワープロの中に閉じこめて家を出るのだ。

幻の中で、母が「性格もトリックスターのよう」になり、「名前も律子からチャリーに変わ」り、「性別が女から男に変わっ」たりする様子は、「母」という「設定」、すなわちジェンダーが言語によって出来ていることを印象



づける。が、殺すべき「母」が言語によって構築されており、その解体もまた言語によらなければならないことは、次章「母の発達」(以後「発達」と表記する)で一層明らかにする。

「発達」では、「縮小」が、「私」ニダキナミ・ヤツノが「高校時代を回想し、三十代に書いた作品」に過ぎず、実際の彼女はずっと家に残って母に仕えた末、四十九歳の時に母を灰皿で殴り殺したことが明かされる。尤も殺しても母は死なずに「リゾーム」化し、ヤツノと母のゾンビは、共同で「母」らしさを解体・再構築しようとする。「全てのおかあさんを表しつつ、実在の正しいおかあさんを絶滅させる方法」としてそこで用いられたのは、「五十音の母」の小話であった。例えば「あ」の母は「あくまのおかあさん」、更にその上を行くサ行の母は、「殺戮、死に神、戦争、総括」の母、中でも最も恐れられるのが「すまんあの母」だとされる。

「す」の母は結局すまんあ、すまんあ、と言いながらひとりで他の母全部を拷問にかけたり、どっかへ売り飛ばしたりして殺してしまつたんや。それからまたひとしきり泣いて、

ああ、おかあさんがふがいないばっかりにすまんあ、すまんあ、すまんあ、…。

「杜子春」の母のような「自己犠牲する母」の欺瞞がここでは暴かれている。また、

「り」の母は理屈抜きの母やった。理屈抜きに息子育てて理屈抜きに大きゅうして理屈抜きに嫁とって理屈抜きに孫産ました。そいで理屈抜きに孫も息子も戦争にやった。

みなさん、私は理屈抜きに頑張って来ました。

て、その時に言った。今は理屈だけと違つて魂も髪の毛もみんな抜けとる。

という具合に、愚かさの仮面の陰で「顕彰」への欲望を満たす「靖国の母」の欺瞞も明らかにされていく。

まるで杜子春のように、「私たちの周辺」は「正しいおかあさん」に包囲されて<sup>(26)</sup>いる。ヤツノ母娘の「五十音の母」小話は、この百年近くの間「小説」その他のメディアがこぞって権威化してきた「正しいおかあさん」像を、人の脳裏に刷り込まれてきた「正しいおかあさん」の物語を、「反転させようとするわけだ。

敵がことばや記号やイメージである以上、それに対抗できる武器や凶器も、やっぱりことばや記号やイメージでしかないでしょう。だからこそ、二人は 実在の正しいおかあさんを絶滅させる記号 を、せつせと製造しては繰り出すのです。(中略)『母の発達』ほど、一気呵成に(とりわけことばのレベルでの)母性を解体してみせた小説はなかったといっているでしょう。ここにでてくる母娘は、けっして特定の母娘ではありません。ヤツノとその母は、身体を張って、命と引きかえに、世のすべての母と娘を「おかあさん」の呪縛から解放とうとしているかのようです。<sup>(27)</sup>

もしもそれが実現するならば、娘は一人前に「成熟」し、母もまた「こどもなくとも母は母」(「発達」というべき、個人としての自立を果たせるはずだ。

## 五、

小話によって発達した母はワープロに姿を変える。「ひらがなキーの上の」文字毎に一体(「発達」ずつ、小さな母が乗った「母」の完成体は、UFOのように家を飛び出し、世界を巡り帰ってくる。「母」達が「三百六十度回転」するのを見ながら、五十三歳のヤツノが死期を悟るのが、最終章「母の大回転音頭」(以下「音頭」と表記)である。

お母さん、私はもう、一生、母に生き母に死んだで、そやでもう孫が欲しいとか言わんといてえな。なあ、お母さん。

だが、なぜヤツノは、自らが解体・再構築した「母」に呑み込まれながら死なねばならないのか。ヤツノの最期は、彼女の仕事が、母と娘の自立・独立にはつながつてはいなかったのではないかという疑問を浮かび上げさせる。自分は「新種の生命体」を開発中のダキナミ女史だと名乗ったころのヤツノの言葉 「発明はね、発明家が

死んでしまうまでは狂気と呼んでおくべきものなのよねっ」(「発達」)を参照し、彼女の死によって初めて新しい「母」が完成するのだと解釈すべきなのかもしれない。だとしても「音頭」では、小話を創作していた「発達」の時期と異なり、ヤツノの関心は母の意を迎えることに向きすぎている。

ヤツノは舞台の上の母に、思わず呼びかけた。

お母さん、お母さん。衣装それで良かった。

母は満足気に答えた。

うむ、わしの子やな。(「音頭」)

五十人の母の衣装に「足先のところが縫い合わせてあるデザイン」を選択したのは、ヤツノが「母の手を借りずにした最初の思考と行動であった」(「音頭」)という。しかし、ただそれだけの「判断」の可否を、ヤツノは母に尋ねずにはいられない。母もまた娘の「判断」を「わしの子」という言葉で支持せずにはいられないとすれば、ヤツノの母も、「新世界の母」を生んで「子のないお母さん」になったはずのヤツノ自身も、まだ「母」の呪縛の中にあると言えるよう。

ここで母の一人称は、邪悪な「母」を象徴する「わたい」ではなく、「わし」になってもいる。世界を巡った後でヤツノに呼び集められ、「矛盾の生むダイナミズムと、戦い合う多様性の豊穡さが同居」(「音頭」)する完成体になった、それゆえの変化なのか、それとも単なる反動か、判断はつきがたい。ヤツノの最期について、「母を支える陰のような存在としてのヤツノは、「新・母」誕生と同時に「死ななければならぬ」<sup>(28)</sup> かったのだとする論もあるが、ヤツノが最後に呼びかける母が「新・母」であるかどうかわからない以上、そこには疑問が残る。

いや、終章ばかりではない。ヤツノは常に、母の「役に立つ」(「発達」)ことをしたいと願い、「母がメイン、自分は助手」(「発達」)として母の要求をかなえ続けてきた。「人工生命体」を発見する「女史で博士」という自称とて、本来母が望んでいた「女医」のバリエーションとも見なされ得るだろう。そもそもヤツノは、母を殺すなり、

おかあさん 好きです 私と 結婚して下さい おかあさんに贈る 愛の灰皿 (「発達」)  
と宣言してもいたのである。<sup>(29)</sup>

だが、これを、ヤツノ自身の墮落若しくは見込み違いと片づけることは早計であろう。この小説の語りは複数の位相によって形成されており、単層の物語として解釈することは困難だからである。

ここで、小説「母の発達」の語りの構造を整理してみよう。

「縮小」の語り手(書き手)は一貫して「私」。「思春期の終わりから」「十数年」母を縮め続けたことを、六年後に文章化したもの、と「私」自身によって規定されている。

一方、「発達」は、基本的に「作者」と名乗る語り手によって語られ、その中に「その日のヤツノの(日記より)」の名で、ヤツノ自身が語り手(書き手)となった一節が差し挟まれる。ただし、「作者」の本文にも、ヤツノの「日記」にも、「作者」による「注」が加えられたり、母との対話が挿入されたり、母との対話の中に「五十音の母」の小話が入ったりと、発話主体は常に入れ変わる。

「音頭」の語り手は(名乗らないが)、恐らく「発達」と同じ「作者」である。ヤツノの日記も注もなく、ただ一度、「母の思い出」という「ダキナミ・ヤツノ 五十三歳」の短い「作文」が引用されるだけである。

このように見てくると、「私」「ヤツノ」による語りや、章を追う毎に減っていることがわかる。また、「発達」の「注」は、質的にもヤツノの言説を相対化する働きが強い。

(注 ヤツノ独白) なにがドイツか私はこの家から結局一歩も出た事がなかったのだ。私がここから出て行くこととする度に母は倒れた。父が愛人のところへ行って殆どそこに住むようになってしまった時は平気だったのに。(中略)

注 確かにそれもまた悲惨な一真実である。そしてまた彼女の母が自立しない娘について嘆き続けた事も事実

であるし、その一方、ヤツノが家を出て行くこととする度に軽い自傷行為を繰り返したり、寝込んだりして、「邪魔をした」事も事実なのだ。だがそうなるも彼女自身がどうしようもなく社会性を欠き、「他に行くところ」がなかった事も事実になってしまつし、その彼女をこの家から追い出さなかつた母親の「寛容」も事実になる。

(中略)

電話を切つたヤツノは二階に上がつて、昨日から開いたままの日記帳に、朝起きてからの事を全部わざと金釘流にして、島根県のシーミーヒーコーおーじ、驚く、さいならつ、と言つ、などと正確に記した。

「シーミーヒーコーおーじ、驚く、さいならつと言つ」というのが「日記」の「正確」な記述であるとすれば、それまで引用されてきたヤツノの「日記」の自己分析はどうなるのか。このようにヤツノの発語をずらし続ける「作者」の語りは、「発達」が「一方的な話」(「縮小」)にならないようにという配慮の域を逸脱し、結果的にヤツノの「日記」の信憑性を根底から揺さぶつていく。そのさまは「私」の母が「なにもかもに凄まじい干渉をし」(「縮小」)したり、「いやらしい」、「得意になっている」(「音頭」)などとヤツノを否定し続けた言動とも似通つてい

だらう。

「ヤツノ独白」などと注記し、ヤツノの語りを「代弁」するそぶりを見せつつ、それを直ちにずらしていくこの「作者」は、「日記」の中にすら侵入する。「五十首の母」小話が一段落して母のコメントが書かれる時、「日記」の中であるにもかかわらず、主語が「ヤツノ」に変化するのである。

日記より

ともかく、私はなんとかあ行を書き上げると母に読み聞かせた。(中略)

ヤツノはまたびつくりした。ワープロを無論新しいものの嫌いな母が買うはずはない。親戚のおさがりをヤツノが貰つて来たのだ。(中略)

適当という事をヤツノはした事がなかつた。が、取り敢えず、手を抜いてみる事にした。(「発達」)

「作者」は、「日記」を書く主体性までヤツノから剥奪していく。こうして、母性イデオロギーの解体を目指す「私」はヤツノの言動は、「母」のスパイであるかのような「作者」によって、徐々に崩壊にされていくのである。

## 六、

このなりゆきは、三つの言語の葛藤としても把握することが出来るだろう。

「縮小」の「私」が得たのは、「グリム童話の訳語で覚えた表現」で、それによって「私」は「自分の言葉が、物語の世界にそっくり入ってしま」う体験、つまり、言葉によって認識の枠組みを変更する可能性を知ったのだ。その「私」はヤツノは「発達」で、「縮小」の「若いテンション」を武器に、「お母さん」ここにはまってる馬鹿な「三重県人」と闘ったのだ。

起きて泣きわめけ濃厚な三重県人ども、何かある度に我慢しろ我慢しろと言って泣きやがって、お母さんは年寄りやで、か。何が、やで、だ。そのやで、はこの池カラトツテキタンダバーカ。(「発達」)

しかし、「五十音の母」小話を完成させ、家出した母を待つヤツノの敵は、いつしか「標準語」に転化している。その「さあ」はそもそもこのドブから拾ってきたんだろうこの大馬鹿鹿野郎め……旅行のはてに三重県に帰って来たヤツノの耳は、関西弁の語尾の「やで」に殆ど愛着を感じるようになってしまっていた。三重県の言葉は、母と語るための言葉だった。(「音頭」)

憎むべきは「標準語をしり上がりにしたようなアクセント」(「音頭」)で気取ってみせるシンディ・ウエハラであり、解体すべきなのは「造り声の標準語」で自分を苛んだ母の一面であった、と語り手は規定し直す。グリム童話の言葉で三重県の言葉を倒す物語は、小話(関西弁)の成立を境に、三重県の言葉で標準語を攻撃する物語に

ずらされているのだ。「音頭」ではヤツノ自身も、「三重県人」として「町内会に入り」「堅実に」暮らすべを身につけている。

この変化の居心地の悪さは、一体何に起因するのか。最も大きな原因は、最終的な敵であるはずの「標準語」の世界と小説「母の発達」が、親和性を持ってしまっていることにあるのかも知れない。小話は、関西弁で書かれているとは言え、「五十音」による。「五十音」によって整理され系列化され、「国語」教科書を介して近代以降の全国の小学生に強制されたのが、「標準語」であり、その「標準語」のもとになった「言文一致文体」によって語り手「作者」が小説を纏める以上、ヤツノの母殺しの試み自体、全て敵の手のうちにあるとも言えるのだ。

最初は母殺しを自主的行動だとヤツノは思い込んでいた。が、結局は母を殺した事すら母の恩恵であった。母を憎むという現象も母の影響であった。(中略)

母音のお母さんも子音のお母さんも、それこそ行列式のように整理していた。帽子も割烹着もとってしま  
い、各々が日本の旗を持った。(「音頭」)

グリム童話の言葉によつて「母語」を離れ得たかに見えた「私」はヤツノの言葉は、「標準語」によつて矮小化され、ついに「母」は国家を賛美する言葉に収斂していくのである。

ヤツノが依拠したグリム童話の言葉、三重県の言葉は、「標準語/言文一致文体」に比べ、一般には通じにくい閉鎖性を持つ。しかし、万人には通じないある種の「狂気」の言葉を繰り出し、「秩序」を揺るがすことこそ、ヤツノの目指したことははずであり、また、それこそ「文学」の役目でもあると言えよう。それが、「三百六十度回転」し得るような「八方美人」な言葉に転換した時、力は失われ、人々が了解する枠組みコドになじむ物語を吸い寄せてしまう。もとの「母」「杜子春」的な「母」が呼び寄せてられてしまうのだ。こうして、「標準語/言文一致文体」の語りは、知らず知らずのうちにヤツノの言葉と試みを浸食し、結局ヤツノの生涯を、「母に尽くして死ぬ娘の物語」に回収してしまうのである。

ヤツノの試みが凌駕されていくのを目の当たりにした読者は、「母殺し」をあきらめるしかないのだろうか。いや、恐らく「母」を殺す言葉は、このテクストの断片の中に埋まっている。語り手が国家の言葉によって纏めた「ツリー」としての物語を内破する力を持つ断片である。ヤツノの死骸の中から、語り手に否定され、浸食されかけた多声性を拾い出し、五十音の整序性を食い破る「リゾーム」性をいかにすくい上げるか。読者それぞれの「母」殺しの成否は、恐らくそこにかかっているだろう。

(1) 「母を恋ふる記」(一九一九)。

(2) 間廬大王自身すら「父母が苦しんでも、その方さへ都合が好ければ、好いと思つてゐる」杜子春を「不孝者」と罵っている。

(3) 真杉秀樹『芥川龍之介のナラトロジー』(沖積社一九九七・六)は、「母」の言葉は「仙人になることを援助する者から与えられる苦痛」だとして、その「ダブル・バインド状況」を分析している。

(4) 上野千鶴子は『近代家族の成立と終焉』(岩波書店一九九四・三)で、明治政府が「家の倫理が国の倫理に従属するように、「家」制度を人為的につくりあげた」プロセスを明らかにしているが、忠と孝が矛盾しないような「家」とは、すなわち、天皇家を做いつつ従属するものだということになるだろう。

(5) 岸田秀『母親幻想』(新書館一九九八・三)では、「家族」を、徴税・徴兵の単位として近代国家が形成したフィクションとして位置づけており、「母」の偏重もその維持のためになされたと論じられている。

(6) 「子ども」という概念が近代(国家)に特徴的なものであることは、フィリップ・アリエス『子供の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家庭生活』(杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房一九八〇・一)、柄谷行人『児童の発見』(『日本近代文学の起源』講談社一九八〇・八)などでつとに指摘されてい



る。

(7) 高等女学校令。

(8) 一九二〇年代には、日本の乳児死亡率の高さを指摘するとともに、それは貧しい母親が他人の乳母となり、実子には牛乳を飲ませることに原因があるとする言説が力を持った。例えば当時、幼児教育界の権威であった高島平三郎などは、「子どもを健全に教養しやうと思ふならば、母が其の心身の撰養に注意し、必ず自己の乳で育てる事を心がけねばならぬ。不幸にして病気のために乳を与へることの出来ぬ場合には、止むことを得ぬが、其の他の事で漫りに乳母を備ひ、又は牛乳を以て子供を育てることは、母たる者の不慈悲を證明すると共に其の耻辱である。」(『教育に応用したる児童研究』洛陽社一九一・一〇)などと語っている。母乳で育てよ、というわかりやすいメッセージは、高等教育を受けなかった女性にも伝わりやすかったことだろう。

大日向雅美『母性愛神話の罫』(日本評論社二〇〇・四)によれば、「大正期の半ば」になると「幼少期の子育てを人智のコントロール下に置き、しかもその責任の大半を母親に託すという考え方」が、育児書を支配するようになるという。一九一〇年代の強迫的な言説が、一〇年ほどの間に実りを見せたのだとも考えられよう。

(9) 石原千秋『漱石の記号学』(講談社一九九九・四)では、「主人」と「主婦」との分業が理想の「伝統」として語られ始めるプロセスを整理しつつ、一九二〇年には、都市部の二〇%以上の家庭が「分業」を実現した新中間層であったことなどに言及している。

(10) 所謂「母性保護論争」での主張。「母性保護の主張は依頼主義か」(『婦人公論』一九一八・五)ほかで、平塚は、「母たることによつて個人的存在の域を脱して社会的な、国家的な存在者となる」母親に、「生活の安定を与へるやう国庫によつて補助すべき」と説いている。これに対して与謝野晶子は、平塚の主張では国家

の「奴隷」(「女子の徹底した独立」『婦人公論』一九一八・三)になると危惧し、女性の経済的自立を主張した。これは正論ではあるが、平塚が念頭に置いていた「私生児」の貧困の問題はこれでは解決し得ない。一方、後述するように、国家のために子どもを生み育てることを容認する平塚の主張は、「靖国の母」言説まであと一歩でしかない。

- (11) 例えば、『主婦之友』等の表紙・口絵が果たした戦意高揚効果については、若桑みどり『戦争がつくる女性像』(筑摩書房一九九五・九)に詳しい。女性雑誌に限らずとも、例えば真珠湾攻撃の九軍神を取材した『アサヒグラフィック』一九四二年一月号では、「軍神」たちの父よりも、母の写真がはるかに大きく掲載されており、その戦死した息子によって名誉を受けるのが「母」であることがよくわかる。

- (12) 牟田和恵『戦略としての家族』(新曜社一九九六・七)は、明治期小学校修身教科書の挿絵の変遷を検討、「孝」や「忠」が強制される段階を経て、一八九〇年代ごろから、「父母への愛や家庭の親しみ、そして国の父母としての天皇・皇后への慈愛が強調」されるようになったことを示している。父母と天皇・皇后は重ねられ、それらに情緒的に繋がることによしとされたのである。

なお、近親相姦の志向が濃厚な谷崎の小説群が、それを「病理」として批判されるわけでもなく受け入れられたのも、「母恋ひ」がある意味で最も体制に順応した心性だったからなのかもしれない。

- (13) 渡部芳紀「作品論 杜子春」(『国文学』臨時増刊号 一九七二・一二)。

- (14) 石割透「杜子春」(『信州白樺』一九八二・一二)。

- (15) 就中、酒井英行『芥川龍之介作品の迷宮』(有精堂出版一九九三・七)は、「母性愛が第三者に対して、往往にして、強烈なエゴイズムを隠し持っている」ことを指摘し、真杉(注(3)参照)も支持しているが、「子供に対する自己犠牲の愛」(酒井)だけは、彼らも疑っていないようだ。

- (16) 片山正男抄訳『男女と天才』(大日本図書一九〇六・一。早稲田大学所蔵のものは、一九〇六年八月で七版

を重ねている。)のほか、一九二〇～六〇年代にかけて、村上啓夫訳のものが繰り返し各社から出版されている。なお、森鷗外「青年」(一九一〇)では、主人公小泉純一の友人大村がワイニングルの思想に感銘を受け、「M+W」のメカニズムを小泉に説いている。ワイニングルの思想は、他にも、有島武郎「石にひしがれた雑草」(一九一八)などに登場するほか、宇野浩二「芥川龍之介」(筑摩書房一九六七・八)でも、芥川とワイニングルを話題にしたことが回想されている。

(17) 江藤淳『成熟と喪失 母の崩壊』(河出書房新社一九六七・六)。同書は、一九九三年一〇月に講談社文芸文庫に収められてからでも、二〇〇四年までに一四刷を重ねている。一刷で絶版となることも多い同シリーズ中では、異常な増刷ぶりだと言える。

(18) 「云ひたくないことは黙って御出」という言葉は、息子の意志を無条件に肯定するだけのもので、実際に黙っていた場合息子が本当に「仕合せ」になるという確証は母にはないはずだ。後の鉄冠子の言葉を信じるなら、黙っていた場合杜子春は死んでいたのであり、この母の言葉は、「息子の心を思いやつて」いるとは言え、極めて思慮に乏しいものだと言つことができるだろう。

(19) 寺山修司「身毒丸」(一九七九年初演)。栗坪良樹は『寺山修司論』(砂子屋書房二〇〇三・三)で、寺山の母殺し願望について、「母殺しとは、母との近親相姦を何度でも実践すること」とだと述べている。母との近親相姦の結果生まれるのが自分であるとすれば、この関係はエンドレスである。

(20) 上野千鶴子「上野千鶴子が文学を社会学する」(朝日新聞社二〇〇〇・一二)。「女装した家父長制」の章は、江藤淳『成熟と喪失』(注(17)参照)に対する応答となっており、安岡「海辺の光景」、小島信夫「抱擁家族」ほか、分析対象にも重複が見られる。

(21) 注20に同じ。

(22) 「慈母」小説が輩出する以前のものであるが、樋口一葉「たけくらべ」(一八九五)、広津柳浪「雨」(一



(図) 萩尾望都『イグアナの娘』より

九〇二)の母などに、それは顕著である。敗戦後のものにも、例えば坂口安吾「母の上京」(一九四七)などに、娘に旦那をあてがって楽をしようという当てがはずれて悔やむ母など、「慈母」小説以前とほとんど変わらないような 娘の母 が登場している。

(23)

斎藤学『家族依存症』(新潮文庫版一九九九・五)。なお、九〇年代には、斎藤や信田さよ子を初めとするカウンセリングの専門家や、西山明といったジャーナリストによって、AC(アダルトチルドレン)についての多くの書物が書かれた。彼らによって挙げられている症例のほとんどは、なぜか女性(娘)である。

(24)

「母の縮小」(『海燕』一九九四・四)；「母の発達」(『文藝』一九九五・秋)；「母の大回転首頭」(『文藝』一九九六・春)の三部構成による。単行本は河出書房新社より一九九六年四月刊、現在河出文庫所収。

(25)

「母の発達」の母は、他県の大学を受験する娘を「ひとり暮らしをしたがるようないやらしい女」だと脅

したり、「医者になれない」なら「ただの女だから口紅を塗れ」と迫ったりするが、これも分身として十分な娘からせめて女性性を剥奪することで、自分との距離を保とうとする、母の必死の抵抗なのかもしれない。このような言動は、萩尾望都『イグアナの娘』（初出『プチフラワー』一九九一・一一、現在小学館文庫所収）の母を想起させる。ガラパゴス諸島のイグアナとして生まれながら、「魔法で人間の女の子」になった過去を持つ彼女には、生まれた娘がイグアナに見えてしまう。自分の「正体」を現前する娘を、母は死ぬまで愛せず、他人には人並み以上に見える娘の能力や容姿を貶め続けるのである。（図参照）一方、その作者萩尾自身は、山岸涼子『アラバスク』に、友人に娘が生まれた知らせを受けた女性が言う台詞「不気味ね」「ああもなりたくなかったこともなりたくなかったという性格がひきつがれて／自分の成長をもう一度くりかえし見せつけられるんだわ」に共感を示している（萩尾望都×三浦雅士「母という鏡に映るもの」『大航海』一九九五・八）。ここで三浦は、「高度成長後、少女コミックが母子関係の病理を映し出す鏡になった」ことを、芥川・太宰・三島らの小説と接続して考えようとしているが、既に述べたように、母

息子の間の葛藤と閉塞を甘美に書き／読む、ホモソーシャルな日本近代文学の世界と、八〇年代以降少女コミックや笹野の小説世界との間には、一定の断絶があると思われる。

(26) 斎藤美奈子「解説 母よ、ちゃぶ台をひっくり返せ」（笹野頼子『母の発達』河出文庫一九九九・五）

(27) 注26に同じ。

(28) 猪熊理恵「笹野頼子『母の発達』論」（専修大学『文研論集』一九九七・三）。

(29) キャロリーヌ・エリアシエフ、ナタリー・エニツク著、夏目幸子訳『だから母と娘はむずかしい』（白水社二〇〇五・九）では、母娘の密着・アイデンティティーの混同は「プラトニックな近親相姦」と名付けられている。その時「父親が占めるはずの場所に」娘は置かれ、「後に娘自身がその関係の枠を保持しよう」と努めるようになる、という。

(30) 他にも、葬式の「花や祭壇は社の人に任せた。が、他の事は全部私が思うようにした。」という「日記」の記述は、母の衣装の決定が「母の手を借りずにした最初の思考と判断であった」（「音頭」という語り手の言葉にすらされるところがある。

(31) 「発達」の中に、人称と焦点化をめぐる混乱があることについては、河野圭亮氏からも示唆を得た。

(32) 清水良典は『文学がどうした？』（毎日新聞社一九九九・六）で、「言文一致文体」は、本来、成人男性の演説口調、すなわち「男性のゼンダーが塗りつけられた」文体であるとしている。そうならば、そこに母性イデオロギーが貼り付いていないわけではないだろう。尤も清水は、作家笹野の軌跡を、言文一致文体からの「声変わりをめざす」ものとして高く評価する。

いわば社会からあてがわれた声や文を拒否し、脱ぎ捨てようとする行為として、笹野の小説は創造されている。言葉はもはや、この国でただ語る存在であるだけで嵌まってしまっているような畏なのだ。たとえば国や言葉さえ「母国」や「母語」と呼ばれるような言語体系への、ほとんどスラップスティックな反逆を、我々は『母の発達』で見ることが出来る。

それに異議を申し立てるわけではないが、ここで見いだせるのはむしろ、そうした言語体系の強固さ、それと闘う営みの危うさの方ではなからうか。

(33) カトリン・アマンは『歪む身体 現代女性作家の変身譚』（専修大学出版局二〇〇〇・四）で、「母の発達」の「リズム」性に触れ、「ヤツノが作る名前と神話は、あまりに多様で逆説的であるため、「母」を一つのまとまった意味に通分できなくなる」と指摘している。